

ハイデルベルク信仰問答講解説教35「神に期待する」(2012年5月6日 礼拝説教)

【聖書箇所】

主はこう言われる。呪われよ、人間に信頼し、肉なる者を頼みとし／その心が主を離れ去っている人は。彼は荒地の裸の木。恵みの雨を見ることなく／人の住めない不毛の地／炎暑の荒野を住まいとする。祝福されよ、主に信頼する人は。主がその人のよりどころとなられる。彼は水のほとりに植えられた木。水路のほとりに根を張り／暑さが襲うのを見ることなく／その葉は青々としている。干ばつの年にも憂いがなく／実を結ぶことをやめない。(エレミヤ17：5-8)

更に、悪魔はイエスを非常に高い山に連れて行き、世のすべての国々とその繁栄ぶりを見せて、「もし、ひれ伏してわたしを拝むなら、これをみんな与えよう」と言った。すると、イエスは言われた。「退け、サタン。『あなたの神である主を拝み、／ただ主に仕えよ』／と書いてある。」そこで、悪魔は離れ去った。すると、天使たちが来てイエスに仕えた。(マタイ4：8-11)

【説教】

信仰問答は「十戒」のところに入っております。少しおさらいになりますが、先週は、十戒は神さまの言葉であるという話をしました。単なる法の羅列ではない。「～してはならない」と人間を萎縮させ、縛り付けるものではありません。むしろそれは人間を自由にし、造り上げるものであります。わたしたちを積極的に生きることへ導きます。ですから問93ではこのように言います。問93を読みましょう。神に対してどのようにふるまうべきか。自分の隣人に対してどのような義務を負うか。この「義務を負う」というのは、責任を持つことだと申しました。義務とか責任という少し敬遠するような気持ちになるかもしれません。けれどもこのことの根底には、主イエスが律法を要約して教えられた「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。」「隣人を自分のように愛しなさい。」この二つの愛があります。信仰に生きることは、この二つの愛に生きることなのですが、それはただ好きだということではない。感情の問題ではありません。生きることなのです。それはしっかり義務と責任を持つことです。そこが肝心なのです。

例えば、家族を愛するという事は、それは何か抽象的なことではなく、具体的に義務を負い、責任を負うことです。家族を守り養う義務。誰かが失敗したら、それは「あなた一人の責任でしょ。あなたが何とかしなさい」とつっぱねるのではない。その失敗を負うのです。ある人が仕事で失敗をした。多額の借金を抱えてしまった。家族に迷惑をかけると思って、その人は妻に別れ話をする。その方が妻や子どものためだと考えた。ところがその妻はむしろ夫を嗜めた。わたしたちは夫婦なのよ。一緒にがんばりましょう。そうやって責任を負うのです。それが愛することです。

皆さんは、信仰に生きる上で、どれほどこの責任を自覚しているでしょうか。神さまを愛すること、人を愛することにきちんと責任を負いつつ生活しているでしょうか。殊、神さまを愛すると言った場合、それに相応しい、責任ある行動をとっているでしょうか。振り返れば、わたしたちは信仰者であると言いつつも、神さまに対して実に無責任に振る舞っていることが多いのではないかと。今日は、問94、95を読みました。言うまでもなく「十戒」の第一戒をここで扱うこととなります。「あなたには、わたしをおいてほかに神があつてはならない」ここはまさしく神さまを愛しているか。神さまに対して責任ある行動をとっているか、その試金石とも言うべきところになります。ここが十戒全体の土台です。あるいは信仰の土台と言ってもよいでしょう。そこがまず問われることとなります。今日は改めてこの第一戒をハイデルベルク信仰問答によって説き起こしてまいりたいと思います。

問94、95を続けて読みます。先ほど、「責任」ということを申しました。責任を持つことはそれなりの覚悟が伴います。

先ほどの夫を見捨てなかった妻は、これから大変な生活になることは覚悟しなければなりません。でもそれが責任を持つことであり、本当に愛することなのです。ここには一つの覚悟が現れています。「すなわち、わたしが、ほんのわずかでも・・・」つまりそれができないならば、すべてを捨てる覚悟があるという、大変ははっきりした言葉です。決意です。神さまをとるか、被造物をとるか。どっちも大切だ。選べない。悩む人もいるかもしれません。

でも悩むことではありません。答えは簡単です。神さまとればよい。じゃあ家族はどうなる、今の生活はどうなる。そう考える人もいるでしょう。でもそういうことがわたしたちに必要であることは、神さまはご存知なのです。だからこそ主イエスは言われます。「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる」(マタイ6：33)と。わたしたちの生活はまず神さまを第一とした時に必ずついてくるのです。そういう約束です。あるいはこう表現することもできます。神さまを愛することを大切にすることでこそ、神さまが与えてくださった様々なこの世のものに正しく関わりをもって生きていくことができる。そこにわたしたちの本当に実りある生活が造られる。今日はエレミヤ書を読みました。ここでは、「実を結ぶことをやめない」そういう祝福された生活が約束されています。

でもそれが逆転してしまうのです。まずこの世の生活、被造物を第一にして、そのあとに神さまのことが来る。神さまが後回し。それでは神さまを愛することにはならないのです。信仰問答では、それは偶像崇拜だとはっきり言っています。問95を読みましょう。偶像礼拝というのは、他の神々を拝むことだけ指しているわけではありません。神さまに代わって、あるいは神さまと並べて、何かを優先させてしまう。自分のこと、この世のことが優先される。そしておまけのようにして後から神さまのことが出てくる。それがすでに偶像礼拝なのです。

礼拝生活もそうです。教会では礼拝を中心とした生活を言います。でもそれはいつも後回しになります。今は忙しい、心のゆとりがない。様々な言い訳を並べては、自分を正当化する。それは甘えです。無責任です。忙しい時こそ、ゆとりがない時こそ、わたしたちは礼拝を守らねばなりません。そういう時が一番御言葉を欲している。そこを第一とした時に、すべては加えて与えられる。それなのに、なぜこの約束を信じられないのでしょうか。この日曜日の時間をさげることが、わたしたちの日々の充実した歩みを造るのです。それでもわたしたちは神さまに代わって、あるいは神さまと並べて、この世のものを持ち出してくる。もちろん罪では分かります。分かるけれどもできない。そこに人間の頭の深さがあります。

また更に注意することがあります。それはそういう礼拝もまた偶像礼拝になる誘惑があるのです。礼拝そのものにわたした

ちを救う力があるとか、聖餐のパンとぶどう酒に救いの力があるとか、牧師や司祭にその力があるとか。そういうことが「魔術、迷信的な教え、諸聖人や他の被造物への呼びかけ」という言葉に表されています。そういう信仰の行為や地上の教会ですら、それを絶対視する時に、それは偶像と化する。自分の教会を愛するがゆえに、自分の教会を基準に、そこを絶対化し、他を批判することがあります。牧師がしてはいけないこと、それは「以前の教会ではこうだった」という話をする事です。それは教会の偶像化です。案外、無意識の内にそういうことをしているのです。

たとえ、この日曜日の時間をささげているとしても、そこでわたしたちの心が神さまに向かっていないということがありません。例えば、礼拝を守る自分に頼り、自分を誇る思いが出てくる。そして他者を裁き、批判する。ならば、それもまた偶像礼拝なのです。自分が中心なのです。また自分は十戒を守っているという自負がある。それは守っていると思う自分を信じていることです。わたしはわたしの力で十戒を守るのではない。これは間88以下のところにあるとおり、自分の中の古い人が死に、よみがえりの命を生きる新しい人に日々悔い改めなければ、決してわたしたちはこの十戒に示された生活に生きることはできないのです。そしてこの新しい命を与えてくださった「この方のみ信頼し」ただ神さまだけを見つめて、神さまの栄光のためにささげられる生活でなければ、それはすべて偶像礼拝につながるのです。間91をもう一度読みましょう。ですから第一戒は難しいのです。

神さまに造られ、かつ救われたわたしたちが、神さまに目も向けず、ただこの世のものに終始することで果たしてよいのでしょうか。それでは神さまを愛すること、その責任を全く果たしていないと言わざるを得ません。それは神さまに対して礼を失しているということではないか。そうなのです。わたしたちは完全に神さまに礼を失しているのです。顔向けできないのです。それができないくらいなら、むしろすべての被造物を放棄する。その最たる者は自分であり、自分自身を放棄するしかない。そのほうがどれだけ気が楽でしょうか。そこに立たなければなりません。

けれども自分を放棄せずとも、神さまのみ信頼し、生きる道があります。それはキリストによるあがない、罪の赦しと新しい命です。このキリストに向かって、日々聖化されていくことしかありません。そこにしか自分を保ちながら、神さまのみ信頼して生きる道はないのです。でもキリストがその道を開いてくださいました。

今日は、マタイ福音書の荒野の誘惑のところを読みました。神さまのみ信頼することを阻む誘惑を主イエスもサタンから直接お受けになられます。「もし、わたしを拝むなら、これをみな与えよう」けれども、主イエスはこの誘惑を退けられます。

「退け、サタン。あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ」主イエスのみがこの誘惑に打ち勝たれた。この主イエスによらなければ、わたしたちは決してこの第一戒を守り行うことはできません。

主イエスは、この愛の責任を果たせないわたしたちが自分を放棄する前に、十字架で御自身を捨てて、その命をもって、わたしたちをあがない、そして復活により新しく造りかえてくださいました。神さまを愛する責任を全く出来ないわたしたちに代わって、御自身が愛を注ぎ出し、その責任を全うしてくださいました。このキリストの命がわたしたちを神さまに向かって建て直すのです。この命がわたしたちには与えられています。これ以上のものはないのです。だから信じましょう。神さまに期待してください。すべてのよきものはこの方から来るのです。キリストがその何よりの証拠です。お祈りをいたします。